

発表要旨

日本におけるバスケットボールの戦術のシステム化に関する一考察
—李想白『指導籠球の理論と実際』（昭和5年）を基軸として—

及川佑介（東京女子体育大学）

本発表では、李想白の主著『指導籠球の理論と実際』（昭和5年）を基軸として、我が国のバスケットボールの戦術が昭和初期にシステム化されたことについて検討する。

昭和初期の戦術を考察した結果、戦術のシステム化は、アメリカからジャック・ガードナー（Jack Gardner）を招聘して講習会を開催した昭和8年以前に、はじまっていたことがわかった。昭和3年にバスケットボールの専門書でシステムという言葉が掲載され、昭和5年には、戦術のシステム化は李想白らが企てていたことを当時の彼自身が述べていた。昭和初期の戦術がシステム化された背景には、同時期に戦術の体系が5名で行う攻防に変化したことが挙げられる。

また、李想白が昭和5年頃のバスケットボールの戦術を「個人的に我儘なプレー」、
「ひどくだらしがない」と述べた。そのように彼が試合内容を評した意図は、戦術に個人技を取り入れることへの躊躇ではなく、個人技を戦術に活かすことが、質の高い戦術になることを理解していたためといえよう。